

---

# 大切な荷ほど重く背負い難い

夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切な荷ほど重く背負い難い

### 【Nコード】

N7487I

### 【作者名】

夏

### 【あらすじ】

銀魂の松陽先生と銀時の出会いと別れを描いた小説です。  
もちろん！作者の想像で！

## 鬼

時は江戸、

そこには一匹の鬼がいた。

その鬼は屍を食らい人々を恐怖におとしめていた。  
(屍：しかばね、死体)

そしてある日の昼、その鬼はあらわれた。

「ん？なんだガキ！」

「飯……」

「ああ!?!」

「飯をくれ。」

「なんだ、こいつぁ。ただの腹すかしたガキか！」

そういうと、刀を持った男たちは笑いだした。

「ねえのか」

「ああ！？あるさ。でも、お前なんかにやるかよ！」

そういうとまた笑いだした。

「そうか…ならいい。」

「待て！お前その刀はなんだ？侍のつもりか？侍をなめんじゃねえぞ！侍の力を見せつけてやるよ！  
行け！ヤロー共！！！」

男たちは一気に鬼に飛びかかった。

が、次の瞬間男たちは悲鳴を上げ倒れていった。  
鬼はすべて切り終わると赤く鋭い眼をたった一人になった男に向けた。

「くっそ。てめえ何モンだ！まさか、お前が…」

そう言いかけた男に刀が刺さった。

返り血が少年にかかり、その姿はまるで…

「鬼…」

銀色の髪に返り血を浴び、赤い眼をした鬼は、侍たちの懐から飯を奪い取り、かぶりついていた。

するといきなり、鬼の頭に大きな手が乗った。

「屍を食らう鬼がいると聞いてきてみれば、君がそうかい？またずいぶんとかわいい鬼がいたもんですね。」

薄く灰色がかつた銀色らしい長髪の男だった。鬼は頭の上の手を振りほどき刀を抜いた。

「それも屍からはぎ取ったものですか？」

鬼は無言でまた赤い目で男を睨む。

「わらし一人で屍の身包みをはき、そうして自分の身を守ってきたんですか……。大したもんじゃないですか。だけど、そんな剣もう要りませんよ。」

男は自分の腰に掛けてある刀に手をかけた。

「人におびえ、自分を守るためだけに振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい。」

そういうと男は刀を取り出し、鬼に投げた。

鬼はあわててキャッチし、目を見開き男を見る。

「くれてやりますよ。私の剣。そいつの本当の使い方を知りたいかやついて来るといい。」

そういうと男は振り返り歩いて行った。

鬼はしばらく見つめ、ついて行った。

ついた場所は寺子屋だった。

「松陽せんせい！お帰りー！」

中からはたくさんの子どが出てきた。鬼は戸惑っているようだった。

「あれ？松陽せんせいそいつ誰？」

一番に鬼に気付いたのは少し目つきが悪い、少し紫に光る髪の毛の男だった。

「さつきそこらで拾ってきました。これからここで皆さんと勉強するので、仲良くしてくださいね」

子供たちは返事をする、松陽という人に導かれ、中へと入って行った。

鬼も後からひっそりと中へ入った。

「そついえば君。名前は？」

「坂田…銀時。」

「銀時か。言い名だ。」

## 幸せな普通の日

銀時が松陽先生のところに住まうようになり早1年。

銀時は桂小太郎、高杉晋助と仲良くなり、今日も3人で何かをしているようだ。

「なあ銀時。松陽先生に何あげたらいいと思う？」

「さあな。俺が知るかよ。自分で考える。」

「じゃ晋助は？」

「まず、金あんのかよ。」

「そこは後だ。」

「そこ重要だろうが！どーせ金ねーんだろ？ズラ」

「ズラじゃない桂だ！銀時こそ。」



そこに松陽先生がやってきた。

「何してるんですか？3人とも」

3人はびくりと肩をあげ、苦笑いを浮かべ寺子屋の中に入って行った。

「あつ。先生に聞けばいいんじゃないか？」

「ばか。聞いたら意味がないだろう！」

「あつ・・・」

突然晋助が声をあげた。

3人は顔を近づけ何やら話しているようだった。

「よし！それで行くぞ！」

どうやら話がまとまったようだ。

そうと決まると桂や晋助らはすぐに寺子屋を出て行った。

銀時は松陽先生のもとへ急いだ。

松陽先生は、春が終り青い葉が生い茂った木を見つめながら、夕焼けに染まっていた。

「松陽先生。」

「どうしました？銀時。」

「今からズラと晋助と遊んでくる。」

「今からですか？明日じゃダメなんですか？」

「今日じゃなきゃ意味がないんだ！」

「仕方ありませんね。でも、なるべく早く帰ってきてくださいね。」

「おう！じゃ行ってくるー」

「行ってらっしゃい。」

松陽先生は駆けていく銀時の姿をしばらく見つめていた。

## 桜の華（前書き）

投稿が遅れてしまってすみません。m ( ) ( ) m <  
受験だったので、できませんでした。

でも、もう終わったので、これからはしっかりとします！  
なので、読んでくださっている方は、これからも楽しんでいただけ  
たら

光栄です。 (^o^ ) でわでワ、どうぞ。

## 桜の華

「すっげー！」

銀時たちはある海辺の花畑に来ていた。

どうやら、松陽には花を贈るようだ。

しかし、花畑というほどのきれいで立派な花は咲いていない。

真ん中に大きな桜の木が立ち、その周りに青や黄色、ピンクといった道端に咲いているような花がたくさん咲いているのだ。

「よしや。さっさと摘んで、松陽先生に持っていきこうぜ！」

「そうだな。」

桂と晋助は早速花を摘みにかかった。が、銀時は一人桜の前に立っていた。

「この桜・・・」

「どうかしたのか？銀時」

不意に言葉が出てしまったのだろう。銀時は、肩をびくつかせ、何でもない。と苦笑った。

「何やってんだズラ。銀時。さっさと花摘め。」

「わかってらあ。」

どのくらい時間が経っただろう……。花を摘むのに夢中になっていた銀時たちは、周りが暗くなっているのにやっと気付いた。そろそろ帰ろう。という桂の言葉で、二人は疲れたように、ああ。とつぶやいた。

この花畑から寺子屋まではそう遠くないが、あまりにも遅い時間になってしまったので、花は銀時に渡してもらおうことにして、後の二人は自宅へ帰ることにした。

「じゃあ、銀時。後は頼んだぞ。」

「ハイハイ。」

「俺たちのことも言っててくれよ。」

「わかってるって。じゃあな。」

「全く。本当にわかってんだろうな……。？」

「大丈夫だろう。あんなでも、やる時はしっかりやる男だ。」

突然、銀時が振り返り、ものすごい血相を変えて二人に近づいた。手は刀に触れていた。

「どうしたのだ！銀時！」

「伏せろ！」

状況を把握できぬまま、二人は銀時の指示通り、伏せた。すると銀時は二人を飛び越え刀を思い切り振りぬいた。低いうめき声が聞こえた。

「クソツ。なんだお前！ガキのくせにツ！」

苦しそうに話す男を、銀時は鋭い目で見下す。男は銀時に圧迫されているように見えたが、口の端がわずかに上がっていた。その瞬間、銀時の後ろから、もう一人の男が切りかかった。

「銀時！」

晋助が叫んだ瞬間、銀時の背中から血が噴き出した。

桂と晋助は銀時に駆け寄った。

「大丈夫か！銀時！しっかりしろ！」

「クソツ。てめえら、ゆるさねーぞ！」

晋助が銀時の刀をつかみ、二人の男を睨みつけた。その手は小刻みに震えていた。

「やめろ・・・晋助ッ。」

「銀時ッ動くな！血が・・・」

「大丈夫だ。」

立ち上がると、晋助の刀をとり、下がってるというのと、銀時は殺気

を放ち、ものすごいスピードで切りかかった。二人の男はあつとい  
う間に何も発せぬまま倒れた。

銀時も崩れるように倒れ、目の前にある血に染まってしまった花束  
を見たのを最後に、意識が途切れた。

## 以心伝心

やわらかい日差しが差し込む。  
心地よい風が頬をさする。

人の気配が隣からする……。

あの時のやつらか……。

ダメだ。起きる俺。

ツラや晋助は……。

守らなきゃ……ッ。

俺が……

俺が！

「くそっタレーーーー！！！！！！」

勢いよく起き上った銀時は気配がする隣の男へ飛びかかるうとした。

「おや銀時。元気なようですね。おはようございます。」

「えっ……。おっおはよう……。」

呆気にとられた銀時は体の痛みに気付き苦い顔をした。

「大丈夫ですか！銀時。まだ寝ていなさい。」

「うつ……。ッ！」

「どうしたのです？」

「先生！二人は？ツラや晋助は！」

「落ち着いて銀時。大丈夫。二人とも元気ですよ。」

「よ……。良かった……」

気が抜けた銀時は崩れるように倒れた。

それとほぼ同時にツラと晋助が駆けこんできた。

「銀時！大丈夫か！！！？」

「ツラ……。」



「はい。じゃしっかり寝とけよ！」

「そうだぞ。ちゃんと寝とくんだぞ！」

「はいはい。さっさと行け。」

なんだかんだいって、お互いの事が心配だったのを3人もわかっていた。  
そんな3人を松陽は愛おしいわが子を見るかのように眺めていた。

## 赤

銀時の傷も癒え、またいつもの騒がしい日々に戻った。

いつも通り、銀時と晋助が小さなからかいから喧嘩が始まり、ツラがそれを止めに入り、松陽先生はそれをほほえましく眺めていた。

今日も何も変わらない。

授業中は寝て、飯食って、剣の稽古して、ツラや晋助と遊びに行く。松陽先生は、今日はずっと書籍にこもっている。手紙を書いているらしい。

その内容は教えてくれない。でも俺は知ってる。それは攘夷という志向を持った者たちへの手紙だということを。先生はときどき攘夷の話をする。「異国のものなど入れてはいけない。そいつらは日本を壊すだけだ。危険なものなんだ」と。だが、俺たちは興味がわかなかった。でも先生はそれでいい。とっていつものように笑うのだ。

「銀時ー変えろーぜ。」

「もうそんな時間なのか？」

「お前、せつかく外に出てきたんだから寝るんじゃないよ。何かしろよ。」

「あー。よく寝た。」

「はあ。ツラはため息をついて、もう知らん。といって一人先にいつてしまった。」

「よっぽど暗いのだろう。すぐにズラの姿が見えなくなった。」

「おい。はやく俺たちも行こうぜ。こんなに暗くなっちゃったら、松陽先生心配するだろ?」

「ああ。だな。」

「妙な胸騒ぎがする。なんだ・・・?」

「俺はツラと晋助と別れてから全力で走って寺子屋まで走った。前まで行くといつもと変わらず寺子屋がある。しかし、どこか違う。様子がおかしい・・・。でも、なにがおかしいのかわからない。」

恐る恐る扉を開け、中に入る。

「先生……？松陽先生……？」

書籍のふすまを開ける。

突然黒い大きな物体が目の前に現れた。

しかもその奥には肩から血を流している松陽先生が。

先生が襲われてる！直感ですぐに状況を理解した。

すると、大きな男がとどめを刺すかのように刀を大きく振りかぶった。

キンッ

金属と金属が交わる音。

松陽先生が驚いていたのが背中越してもわかった。

「銀時！何をしていますのです！わたしの事はほっというて早く逃げなさい！」

「へっ。んなことできるかよッ。」

「なんだ？このチビは。」

もう一度大きく振りかぶった。

しかしそれをまた銀時は受け止めた。が、肩から血が吹き出た。

「銀時！」

「えっ？なん……で……」

その場に崩れるように倒れこんだ銀時を松陽は抱えて寝室へ逃げ込んだ。

「銀時。すみません。こんなことに巻き込んで……。」

「せん……せえ？」

「ここでおとなしくしててくださいね？」

さみしそうに笑った。こんな笑顔は初めて見た。

いやな予感がした。もう二度と先生が戻ってこないんじゃないか・・・。そんな・・・。

「先生！行かないで！先生もここにいてよ！」

「銀時。あなたは強くなる。いえ。強くなりなさい。」

「先生？先生！！！」

ふすまを開けようとしてもあかない。

銀時は肩からあふれ出す血も気にせづふすまをたたき続けた。やつとこのことで穴が開いた。その時。

松陽先生が切られた。

目の前に赤が散らばる。

これは・・・何？

血・・・？

誰の・・・。

せんせ？

頭の中で何かが切れた。  
声にならない叫びが部屋中に響いた。

失

男が立ち去った後、寺子屋には火が放たれた。  
するとたちまち火は大きくなり、寺子屋は赤に染まった。

「せんせ……。」

目の前に倒れている己の恩師を呼ぶ。

目を開けてよ……!

また、いつものように笑ってよ……!

これからはちゃんと授業うけるから!

これからは家の手伝いたくさんするから!

ツラや晋助と喧嘩しないから!

だから……

だから……!!

「俺を一人にしないで!!!」

俺はそのあと、いきなり現れた大人たちに連れられて外へ出た。先生も運び出そうとしてくれたが、その瞬間、家が崩れた。

「先生!!!」

「おい。早くその子を連れて離れるぞ！」

え・・・？

「ちょっと待てよ！先生が・・・まだ松陽先生が残ってんだろ！」

「もう無理だ。すまん。」

「待つてよ……！ヤダよ……。助けてよ！先生大怪我してるんだ！だから早く医者に見せなきゃ」

そつだ。まだ間に合う！まだ！

「おい！早く連れてくぞ！」

「待てよ！離せよ！ふざけんなッ！」

子供が大人の力に適うはずがなく、銀時は門の前まで運ばれた。周りには見物に来た者がたくさんいた。

「なんだよあの子。異様な髪色だ。」

「赤い目。鬼だわ！」

「鬼だ！」

ズキン

あれ？どうしたんだらう？

「鬼！」

ズキン

なんで……

「化け物！」

ズキン……ズキン



## 大切なもの

火が消され、黒い煙が立ち込めた。  
しばらくすると、ツラや晋助がひきつった顔でやってきた。

「銀時！大丈夫か！？」

ツラが真っ先に近づいてくる。

しかし、返事をする余裕など銀時にはなかった。

晋助は焼けおちた寺子屋を見つめ、放心状態になっている。

「せんせ……。」

「えっ？まさか……」

「おい！銀時！先生は！？松陽先生は！！！！」

晋助はずっとうつむいたままの銀時の肩を激しくゆすった。

「銀時……。」

「……………ごめん。」

「……………なん……で？なんでだよ！なあ！銀時！！！！！」

「やめる晋助！銀時は怪我しておるのだぞ！」

「……………ごめん。オレ、先生守れなかった……………」

「うそだろ……………？先生……………！せん……………セツ……………。」

「松陽先生……………。」

二人とも崩れるように泣いた。

赤いものは嫌いだ。  
すべてを焼き尽くす火も、血も  
赤は俺の大事なもんを奪っていく。

いつか、先生は俺の赤い目を見てきれいだといった。  
初めてだった。みんなこの眼をみて『化け物』や『鬼』と呼んで恐  
れたから。

先生のおかげで、少しだけ。  
ほんの少しだけ自分の事が好きになれた。  
でも、やっぱり嫌いだ。

赤は嫌い。  
もう、赤は見たくない……。

ツラが顔を上げると銀時が自分の刀を自身の目の前に構えていた。  
晋助も顔を上げ目を見開いている。



松陽は銀時にとって、いや、銀時、ツラ、晋助にとってとても大きな存在だった。

大切な、大切なもの。

しかし、その分失うものは大きく、とても残酷なものだ。

だから大切なものほど背負い難い。

失った時の悲しみが大きく、重いから。

大切な荷ほど重く背負い難い。

## 大切なもの（後書き）

いままで読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7487i/>

---

大切な荷ほど重く背負い難い

2010年10月10日02時06分発行